台大日本語文研究第 50 期
2025 年 12 月，頁 71-97
2025-09-30 收稿，2025-11-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202512_(50).0004

日語外來語「る動詞」之研究

林慧君*

摘要

本稿以日語外來語加上動詞活用語尾「る」所形成的外來語「る動詞」作為考察對象。透過辭典、先行研究，以及社群媒體平台 X（舊 Twitter）的實態調查，對外來語「る動詞」的構詞現象進行實證性的分析與考察。

首先，從音節拍數、詞形及品詞等構詞觀點考察外來語「る動詞」的構詞特徵。其次，藉由與外來語サ變動詞之比較，探討外來語「る動詞」化的相關各種問題。最後，從語義領域的觀點分析外來語「る動詞」語幹及外來語「る動詞」本身，進而論述與外來語「る動詞」形成相關之語義及用法特徵等。

筆者於本稿中分析了外來語「る動詞」在音韻、詞形及語義用法等方面所呈現的各種構詞特徵之外，同時並針對外來語「る動詞」與外來語サ變動詞在位相及構詞性質上的差異做了詳盡的論述。最後，亦闡述：由於「る動詞」具有能夠與非具有動作性名詞語幹相結合之構詞特徵，使得年輕人廣泛且輕易地活用此一便捷構詞法，因此「る動詞」造詞得以盛行。

關鍵詞：外來語、「る動詞」、サ變動詞、構詞、俗語性質

* 國立台灣大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Study on Japanese Loanwords as '-ru Verbs'

LIN, Hui-jun*

Abstract

This study investigates "-ru verbs" derived from loanwords in Japanese, focusing on their formation and usage. Drawing on dictionaries, prior research, and actual usage on the social media platform X（formerly Twitter）, the paper offers an empirical analysis of morphological and semantic characteristics of these verbs.

First, the study analyzes morphological features such as syllable count, word form, and part of speech. It then compares loanword -ru verbs with suru verbs, highlighting differences in word-formation processes. Finally, from a semantic perspective, the study investigates both the noun stems and -ru verbs, clarifying their semantic and usage characteristics.

The findings show that although these verbs may lack inherent actionality, the simple and convenient process of attaching "-ru" to noun stems has led to their widespread use. This ease of formation helps explain the productivity and colloquial nature of loanword -ru verbs in contemporary Japanese.

Key words: loanwords, -ru verbs, Sa-hen Verbs, word formation, colloquial nature

* Professor of Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

日本語の外来語「る動詞」の研究

林慧君*

要旨

本稿は、外来語に動詞の活用語尾「る」がつく外来語「る動詞」について、辞書や先行文献、またソーシャルネットワークサービスX（旧 Twitter）などの SNS における実態調査を通して、その造語特徴を実証的に分析、考察するものである。

まず、拍数、語形、品詞といった観点から、外来語「る動詞」の造語的特徴を分析する。次に、「外来語サ変動詞」との比較を通して外来語「る動詞」化の問題を考える。最後に、意味分野の観点から、外来語「る動詞」の語幹と外来語「る動詞」自身についての分析を行い、外来語「る動詞」の形成における意味用法の特徴などを明らかにする。

結果として、外来語「る動詞」における音韻及び語形上、意味用法上などの造語特徴と、外来語「る動詞」と外来語サ変動詞における位相上や造語性などの相違点を論述した。最後に、動作性のない名詞語幹とも結合するという外来語「る動詞」などの造語特徴から、このかなり便宜的な造語手段は若者たちによって安易に活用され、「る動詞」の造語が盛んなわけだとも論及した。

キーワード：外来語、「る動詞」、サ変動詞、造語、俗語性

* 国立台湾大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

日本語の外来語「る動詞」の研究

林慧君

一、はじめに

日本語は昔から外国語を多く受容して借用してきた。その借用したことばは、当然ながら日本語の文法体系に従って用いられている。外国語から借用したことばつまり外来語は、最初は名詞として受け入れられる場合が多い[1]が、その後文法性に応じた語形変換の操作によって他の品詞として用いられるようにもなる。この点は、いわゆる漢語も同じである。動詞の場合を例にすると、漢語も外来語も動作性の意味を有する場合、その語にサ変動詞「する」を付けることによって動詞化する。例えば、「離脱する」「展開する」「タッチする」「カットする」などである。漢語と外来語の動詞化は、このサ変動詞「する」の付加による手段が最も一般的である。

ところが、近年「する」ではなく、動詞の活用語尾「る」をつけることによる外来語動詞化も多く見かけられるようになった。例えば「メモる」「ミスる」「タピる」「ググる」などが挙げられる。特に若者同士の間では、いわゆる若者ことばの一種としてこのような「る動詞」[2]の使用が広がっていることが報告されている[3]。

本稿では、このような、外来語（もしくはその変形）に動詞の活用語尾「る」がつく、いわゆる外来語「る動詞」を考察の対象に取り上げる。まず、外来語「る動詞」の造語実態の調査のためには、どのような外来語「る動詞」があるかを把握することが必要であるが、そのために本稿では、従来の外来語の辞書や先行研究からはもちろん、ソーシャルネットワークサービス（SNS）の一つであるX

1 野村（1982:42）、松井（1982:156）、村木（2019:497-498）などに言及されている。

2 このような様々な語に動詞活用語尾「る」が付く語は、「ル動詞」や「る動詞」「派生動詞」などと呼ばれることがあるが、本稿では「る動詞」と称することにした。

3 上野（2016:122）、杉岡（2019:54）、井上（2020）、田川（2020）を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

（旧 Twitter）からも外来語「る動詞」をピックアップすることにした。それは、辞書などは規範性を有するものなどに収録が限られているという限界があるが、造語実態をより網羅的に考察するために必要と思ったからである。

収集した外来語「る動詞」を対象に、拍数、語形、品詞といった観点から、外来語「る動詞」の造語的特徴を分析する。次に、サ変動詞との比較を通して外来語「る動詞」化の問題を考える。最後に、意味分野の観点から考察を行い、外来語「る動詞」の形成における意味用法の特徴などを明らかにしたい。以下、本稿での「る動詞」は、特に断らない限り、外来語「る動詞」をさすことを断っておく。

二、先行研究について

外来語「る動詞」にふれた主な先行研究としては、窪園（2002）、堀尾（2008）、米川（2017）、杉岡（2019）、井上（2020）を挙げることができるが、以下に諸先行研究の論点を形態、意味用法からまとめ直し、残された問題点を指摘しておく。

形態に関しては、語尾「る」の前接する語幹には縮約された語形が多いことから、外来語の語幹が先に縮約された後に語尾「る」が結合するというプロセスによって形成される（窪園 2002:87、堀尾 2008:84）。その前接する語幹の品詞は名詞が多く（窪園 2022:87、井上 2020:12）[4]、語幹の長さを見ると、語尾「る」を含めて 3 拍語が多い（井上 2020:13）とされる。

次に、「る動詞」の意味用法に関しては、名詞語幹の場合、特に固有名詞では「特定人物の取りそうな問題行動をする」、場所などの固有名詞で「その場所へ行く／そこで何かをする」などの意味を表す（堀尾 2008:89）と述べられ、「ある場所で飲んだり食べたり遊んだりする」という意味の「る動詞」が大半である（窪園 2002:87）ことも指摘されている。なお、特定人物の問題行動を批判的に表現した

[4] 中には、外来語自身が「ル」で終わることから来たとされる「る動詞」（「ググる」「ダブる」など）もある（杉岡 2019:55）

臺灣大學學術期刊資料庫

り、人の欠点をあげつらったりする否定的な意味合いのものが多い（堀尾 2008:89、窪園 2002:88）と言う。

他に、位相と関連して、若者ことば以外に「ノイる」（医療業界）や「スタンバる」（テレビ業界） などといった様々な業界用語があることが米川（2017:41）で報告されている。

上のような先行研究には次のような問題点がまだ残されていると思われる。

まず、「る動詞」の語例の調査があまり十分ではなく、多くの場合、外来語全体の形態的な分析や、新語・若者ことばに関する記述の中で部分的にふれられている程度であり、実態調査が欠けているため、「る動詞」の全体像を把握できるとは言い難いと思われる。

例えば、先行研究では語尾「る」の前接する語幹は名詞が多いとされているが、現に、英語「neglect」という動詞成分からの「ネグる」（「無視する」「怠る」の意） や「delay」からの「ディレる」などの例も見かける。また、「る動詞」は語尾「る」を含めて 3 拍語が多いと言われるが、「ハロウィる」や「ピクニックる」などの 3 拍以上の「る動詞」も見られる。拍数の面でも、十把一絡げではない詳しい調査が必要と思われる。なお、否定的な意味合いを有するのが多いということ以外に、意味用法上の特徴はないのかについても再検証すべきであろう。要するに、再検討と分析を通して、「る動詞」の語構成の全体像を明らかにする必要があると考えられる。

他には、外来語の動詞化の二つの方法、つまり動詞化語尾「る」の付加による「る動詞」と、動詞「する」を付ける外来語サ変動詞の両者における異同についてもさらに詳しく論述する余地があるようにも思われる。

ところで、本稿では「る」を動詞化語尾として考えることにする。堀尾（2008）では「動詞化接尾辞『－る』」としているが、基本的に

臺灣大學學術期刊資料庫

「る」は、活用語尾のような振る舞いをするので、接尾辞というよりは動詞の（活用）語尾として扱うべきだと考えるからである。[5]

三、調査方法

ここでは、第一節で述べた本稿での語例収集について詳しく述べることにしよう。辞書は、『コンサイスカタカナ語辞典』（第 5 版）と『現代用語の基礎知識 カタカナ外来略語辞典 第 5 版-LogoVista 辞典ブラウザ』という二冊を採用した[6]。

本稿の特徴は、ソーシャルネットワークサービス（SNS）も用いていることである。規範性の高い辞書などの例に比べ、SNS は主に若者たちが使っているので、そこで用いられていることばには新語や俗語、若者ことばが多く、それほど定着もしていないし、あまり規範的でもないことばが多く見られると予想される。冒頭でも述べたが、「る動詞」の若者ことばとしての性格の強さもあるので、 資料から語例を収集することは有効的で、かつ必要のある作業と判断したからである。SNS としては、若者たちがよく使っているX（旧 Twitter）を用いることにしたが、そこから 2010 年 3 月～2024 年 9 月の投稿から「る動詞」を抽出することにした[7]。

本稿は、やや規範性の高い「る動詞」のグループと、規範的でもなく、まだ定着していないと思われる「る動詞」のグループの間に、何らかの相違点があるかどうかを検討することも目的の一つなので、辞書・先行文献の例と、X で使われている例との比較、分析も進めていく。ただし、後者のX から抽出した語例には前者の辞書・先行文献から収集した語例と重なっている例もあるが、以下本稿で言うX の語例とは、X にのみ出現する語例だけを限定して指すことにす

---

5 「る」を動詞語尾と見るものに、米川（2017）と杉岡（2019）がある。

6 語例収集に用いた先行研究は、参考文献を参照されたい。

7 X の語例収集に当たっては、まず、X の最新の投稿から検索機能を用いて「る動詞」と入力し、本稿の考察対象の「る動詞」だけを先にピックアップした。その後、その「る動詞」単語を用いて再検索して例文を収集した。

臺灣大學圖書館

る。調査の結果、辞書・先行文献からの「る動詞」は 63 例あり、X の語例は 229 例を抽出できた。

ここで二点断っておきたいことがある。一点目は、本稿の考察対象を語幹が外来語の場合に限定したことと関連してだが、カタカナで表記された「ライクる」「ラストマイる」「ランペる」などの日本の固有名詞は、和製の外来語だと考えることもできるので、広く範囲内に入れ、考察の対象とする。もう一点は、『俗語は面白い！俗語入門』にしか言及されていない例である。これらは Xにも見当たらない業界用語としての「る動詞」が多いが、規範性がない点で辞書などの例とも異質で、現にその本に“全く使用しないこともある”とも述べられている[8]ことも考慮に入れ、定着度の低いXの語例の中に入れることにした。

以上のようなことを考慮し、本稿では、ある程度定着していて規範性もややある「る動詞」の多い辞書・先行文献などを「辞書他」と略し、一方の、定着度も規範性も低い「る動詞」の多いXと『俗語は面白い！俗語入門』を併せて「X」と略す。

四、分析及び考察

本節では外来語「る動詞」について、まず、拍数や縮約有無、品詞、語形などの語構成的観点から語幹を分析することから、「る動詞」の造語的特徴を解明する。次に、サ変動詞との比較を通して動詞化の問題を考える。なお、「る動詞」の形成に関わる意味用法の特徴などを把握するために、意味分野の観点から「る」の前接語幹及び「る動詞」自身についての検討を加える。

（一） 語尾「る」の前接語幹について

まず、本節では前接語幹の拍数、語形の縮約、そして品詞の観点から分析を行う。

[8] 米川（2017:41）。

臺灣大學學術期刊資料庫

「辞書他」と「X」における前接語幹の拍数を調べた結果を表一で示す。

表一　前接語幹の拍数

音節数	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
辞書他	1(1.6%)	48(76.2%)	13(20.6%)	1(1.6%)	0	0	0	0	63
X	1(0.4%)	132(57.6%)	62(27.1%)	23(10.0%)	9(3.9%)	1(0.4%)	0(0%)	1(0.4%)	229

表一の結果から、前接語幹の拍数が 2、3 拍に集中しており、全体的には「辞書他」と「X」において同じ傾向を見せていることがわかる。特に「X」よりも「辞書他」のほうがこの傾向は顕著であり、2 拍語だけでも 7 割強であり、3 拍の語幹を合わせると全体の 97%も占める。この結果は、井上（2020:13）の「る動詞」全体の拍数は殆ど 3 拍が多いとの指摘、堀尾（2008:86）の「る動詞」は「3 拍・4 拍が好まれるようである」との見解と概ね一致している。

今回の調査結果での特異点もある。それは 4 拍語幹、つまり 5 拍「る動詞」の傾向である。「辞書他」では 1 例しか見られないのに対して、「X」には 23 例（10%）が見られるのである。また、「X」の場合は 5 拍以上の語幹も見られることで、その現象は連続的である。つまり、「X」において、語幹の長さの制限が少し緩んでいると捉えられる。

このことは、規範性と定着度の高い、即ち典型的な「る動詞」は、2，3 拍語幹つまり 3，4 拍動詞であるものの、最近の SNS 空間での若者ことばでは拍数の多い「る動詞」も多く造語されていることを意味する。これからの「る動詞」増加の方向性の一端を見ることができるとも言えようか。

次に、語形の縮約有無について「る動詞」の語幹を調査した結果を表二にまとめる。

表二　前接語幹の縮約の有無

語幹の縮約有無	有	無	合計
辞書他	50(79.4%)	13(20.6%)	63
X	164(71.6%)	65(28.4%)	229

臺灣大學學術期刊資料庫

この結果を見ると、「辞書他」の場合は縮約有りと縮約無しが約 8 対 2 で、「X」の場合はだいたい 7 対 3 であり、基本的にはおおむね似ている傾向が見て取れる。要するに、「る動詞」の前接語幹には縮約形が用いられる傾向性が高いことが観察された[9]。

次は、「る動詞」の前接語幹を品詞の面から調べてみる。ここで一つ断っておきたいことは、(一般) 名詞、動詞、形容詞といった一般的な品詞分類の他に、固有名詞と動名詞を別項として立てることである。その理由は、まず、今回の実例調査の結果、前接語幹に固有名詞が来る例がかなり多かったからである。また、後に検討する動詞化の問題と関連するが、一応名詞である前接語幹でも動作性の意味が含まれる場合に動詞化しやすいだろうという仮説からである。なお、ここでいう (外来語の) 動名詞とは、例えば「キャンプ (する)」「ドライブ (する)」など既にサ変動詞化したものは勿論であるが、例えば「キャビる」などのようなものも含まれる。この「キャビる」は、英語の「cavitation」か「cavitate」から由来したと思われるが、同じ語根を有する外国原語の動詞か名詞からの外来語語幹であり、意味的にも動作性を有している故、このような場合も動名詞語幹とする。

上の基準で分類した、「る動詞」の前接語幹の品詞調査の結果を、表三に示す。

表三　「る」の前接語幹の品詞

語幹の品詞	一般名詞	固有名詞	動名詞	動詞	形容詞	合計
辞書他	21(33.3%)	16(25.4%)	11(17.5%)	15(23.8%)	0(0%)	63
X	98(42.8%)	54(23.6%)	44(19.2%)	23(10.0%)	10(4.4%)	229

上のからは、固有名詞と動名詞までも含む「名詞類」が「辞書他」では 75%、「X」では更に高い 86%にも上っていることが見て取れる。つまり名詞語幹から派生した「る動詞」が最も多いことを、まず再確認できた。ところが、詳しく見ると、「辞書他」と「X」にお

[9] 縮約の傾向性は窪園 (2002:87)、堀尾 (2008:84) にも指摘がある。

臺灣大學學術期刊資料庫

いて、固有名詞と動名詞の場合には差があまりないのに対し、一般名詞と動詞の場合には違いが見られる。以下に詳しく見てみよう。

まず、「辞書他」と「X」いずれにおいても、一般名詞由来の語幹がもっとも多いことが認められる。特に、「X」の場合には一般名詞が 4 割強を占めている。一般名詞の外来語からの動詞化が「る動詞」派生の基本的な造語パターンと言えよう。この点、語として定着しているとまではいえないものも多く見られる「X」において、一般名詞の比率が半分近くになっていることもその傍証であろう。

次に、固有名詞の場合が、「辞書他」と「X」の両方とも 1/4 の比率を占めている。これらの固有名詞には、例えば、「スタバる」「ハロウィる」「バーフバる」「ハニデュる」「コボる」などのような、店名やゲーム名、映画名、食料品名、人名などが挙げられる。

他に、動詞由来の語幹の場合、「辞書他」においては 1/4 近くもの語例があるが、これらにどのような背景があるのかについては後の（三）で検討することにする。また、「X」には、英語の「favorite」からの「ファボる」など、形容詞由来語幹の「る動詞」もヒットした。若者ことばにおける多様性が表れているようで興味深い。

（二） 外来語「る動詞」の造語的特徴

前節で見た、「る動詞」の語幹における拍数、語形縮約、品詞という三つの観点からの形態的特徴を踏まえて、本節では外来語「る動詞」の造語的特徴を考察するが、まずは音韻上及び語形上の二つの側面から分析する。

1. 音韻上の理由

「る動詞」語幹の長さについては、2 拍がもっとも多く、次に 3 拍、更に 4 拍の場合も見られたと前に論じたが、この長さ、つまり拍数には、語幹の語形縮約の有無が関わっているが、語形縮約には原形内の特殊音素が深く関与しているようである。

まず、語幹の原形内に撥音が含まれている場合を見てみよう。例えば、「キャンプ」という外来語は 2 拍目が撥音であり、2 拍の語幹に縮約できず、3 拍のまま活用語尾「る」と結合している。他に、

臺灣大學學術期刊資料庫

「ランペる」「リンスる」も同じパターンである。なお、「スタンバる」の場合は、原形「スタンバイ」の 3 拍目が撥音のため、4 拍目まで残されていることを見ることができる。しかし、原形の末尾が撥音の場合は縮約されやすい傾向にあり、例えば、「アマゾる」「ハロウィる」などのような「る」動詞を形成する。

次に、語幹の原形の 2 か 3 拍目に促音がある場合も同じである。例えば、「ラップ」は 2 拍目が促音のため、2 拍で語尾「る」と結合できず、縮約のない語全体で語尾「る」と結合する。「ブロックる」なども同様の例である。

なお、語幹原形の 2 か 3 拍目が長音の場合についても、同じ傾向が認められる。例えば、「ゲーム」は 2 拍目が長音であるため、3 拍以下を縮約すると、長音に語尾「る」が付く形になるが、意味が分かりにくい点もあり、これを嫌うと思われる。そのためか、「ゲーム」縮約されない形で活用語尾「る」と結合すると考えられる。他に、「ダーツる」「ローソる」や「スケートる」なども、同じ理由により語幹原形の長音が縮約されぬケースの例と思われる。

一方、語幹原形の末尾が長音の場合は、脱落されやすいことが見受けられ、「シャワる」「ディズニる」「ディレる」「ベビる」「ヤフる」など、多くの例を挙げることができるが、「ハニデュる」の場合も、上記の長音残留とは傾向を異にする例である。これは、スターバックスの「ハニーデュー（HONEY DEW）」という飲み物からできた「る動詞」であるが、原形の 3 拍目及び末尾の 5 拍目の長音が残されることなく、二つの長音ともに脱落してできた語形である。また、「ハーモニー」からの「ハモる」も同じである。

以上、「る動詞」の縮約の有無という造語的特徴を、語幹原形における音韻上の側面から検討したところ、「る動詞」の語幹原形の 2 か 3 の拍目が特殊音素つまり促音、撥音、長音の場合、その特殊音素が活用語尾「る」と直接結合することを嫌い、結果的に語幹が長め

臺灣大學學術期刊資料庫

になることを確認できた。[10] 一方、撥音、長音が語幹原形の末尾に位置する場合は脱落しやすく、「る」動詞の語幹には縮約形が用いられやすい。

このような結果は、上野（2016:126）で、語幹最後の拍が長音や拗音の場合には、例えば「チャーる」のように長音が直接語尾「る」と結合して「る動詞」になることが可能だと述べられていることとは逆の傾向であった。本稿では、実態調査による考察では、長音の場合も撥音・促音と同じく、直接語尾「る」と結合しにくく、長音が縮約された語幹をもつ「る動詞」の形成例が多数観察された。

2. 語形上の特徴

上述した通り、「る動詞」の語幹は活用語尾「る」と結合する際に、語幹部分に縮約などの何らかの語形操作が見られるのが一般的であるが、本節では、「る動詞」における語形上の特徴を考察する。まずは、その結果をまとめて示すと、次の五点になるかと思われる。

a.［短い語形の語幹＋る］

b.［略語形の語幹＋る］

c.縮約された語幹と「る」との結合

d.原形がそのまま「る動詞」になる

e.「る」活用形との連想

以下、順に論じていく。

a.［短い語形の語幹＋る］

（一）で「る動詞」の語幹は2拍もしくは3拍のものが多いと論じた。語幹原形が2か3拍の語は、何らかの省略または縮約なしに、そのまま語尾「る」と結合し、簡単に「る動詞」が造られる。例えば、

[10] 上野（2016:126）に、「ル動詞を含むすべての子音語幹動詞の語幹末尾は母音＋語幹末尾子音でなければならない」と述べられている。例えば、オノマトペの場合、「べたべた」からは「べたる」というような「る動詞」は言えそうであるのに対し、「ルンルン、どんどん」などから、「*ルンる、*どんる」といった「る動詞」の形成はまったく不可能だと言う。本稿の場合、外来語語幹の促音、撥音、長音という子音音素が直接活用語尾「る」と結合しにくいのも同じ音韻上の理由によると考えられる。

臺灣大學圖書館授權資料

「コメダる」「ゴルゴる」「ゴルフる」「サイクる」
「サウナる」「ダンスる」「テイクる」「ディスコる」
「ピアノる」「マリオる」「ミスる」「ラップる」…

などがそれであるが、3 拍語の語幹と「る」との造語パターンが殆どである。

b.［略語形の語幹＋る］

語幹原形がそもそも外来語の省略語としてよく使用される場合、その後に語尾「る」が付き、簡単に「る動詞」を形成する。例えば、

「コピペる」「コロナる」「コンパる」「コンビニる」
「チョコる」「デモる」「テロる」「ミスドる」「モスる」…

c.縮約された語幹と「る」との結合

これは、何らかの縮約または省略という操作を経てできた語幹をもつ「る動詞」のことを指すが、これは、語幹が既に外来語の省略語としてよく用いられる b 類の「る動詞」と違って、c 類の語幹は「る動詞」化するに当たり、初めて縮約されたと考えられる場合である。単純語と合成語に分けて見てみよう。

単純語の場合、例えば、「キャリブる」（←calibration）、「ソリティる」（←Solitaire）、「デグレる」（←degrade）、「ナルコる」（←Narcosis）[11] などは、外国原語の語根（root）[12]に当たる部分だけに縮約された後、語尾「る」と結合した造語である。

一方、合成語の場合は、語形が非常に長くなる場合が多く、そのためか語尾「る」との結合の際に、合成語原形の前後の構成要素に省略または縮約が起こる場合である。これらには、例えば、「シャインマスカる」（←シャイン＋マスカット）、「セグフォる」（←segmentation fault）などのように、前後の構成要素の両方に縮約が見られるタイプと、前後の構成要素のうちどれかの一つだけが残

[11] 下線は、構成要素縮約の際に残った部分である。
[12] 「語根」（root）というのは、元々は英語の形態論の概念であり、一般的には例えば「singers」の「sing」のように、「語からすべての屈折接辞と派生接辞を取り除いたあとに残る要素」（大石（1988:11））を指す。一方、本稿で言う「語幹」とは、日本語の活用語における、活用しない部分を指し、例えば、動詞の語幹のこと（ex.「食べ＋る」「遊＋ぶ」など）である。

臺灣大學博碩士論文

る、例えば、「アバタる」（←Avada Kedavra）、「イマシブる」（←Immersive museum）、「ステイサムる」（←（人名）Jason Michael Statham）などのタイプが見られる。

d.原形がそのまま「る動詞」になる

これは、その語基となる外来語原語の末音が「l」や「le」、「r」といったものの場合である。これらは、日本語に借用される際に「ル」という拍が表れるが、この最後の拍「ル」がちょうど「る動詞」の語尾「る」と同音になり、そのまま「る動詞」化するものである。結果的に、外来語原形がそのまま「る動詞」になるとも考えられるものである。例えば、

「アベル」（avail）、「イスラエる」（Israle）、
「カラフる」（colorful）、「サイクる」（cycle）、
「ダブる」（double）、「テロる」（Terror）、
「トラブル」（trouble）、「バトる」（battle）…

などである。このような語は、本来の外来語の意味と、その「る動詞」化の動詞の意味を持ち合わせていることになるが、表記によって区別される。

e.「る」活用形との連想

これは、上記 d とは異なり、外来語原語の末音に「l」や「le」、「r」があるものの借用の際、最後の拍に「ル」ではなく、「リ」や「ラ」などの拍が生じた外来語の「る動詞」化に見えるパターンである。例えば「デリバる」は、「デリバリー」の末尾の長音を省いた後残る「リ」が、語尾「る」の連用形と同じであることからの連想でできた「る動詞」である。「アルハンブる」の場合は、日本のジュエリーブランドの「アルハンブラ」（Alhambra）の最後の拍「ラ」を、語尾「る」の未然形と音連想から、「る動詞」化したものである。他に、

臺灣大學學術期刊資料庫

「バーフバる」(←「バーフバリ」映画)、「メルカる」(←「メルカリ」(mercari))のような例も見られた[13]。

以上、語形上から外来語「る動詞」の造語的特徴を検討したが、その結果は二点にまとめられると思われる。一つは「る動詞」の語幹になるものは短い語形が好まれることで、本来の語形が短い場合はそのまま語尾「る」と結合するが、語形が短くない場合には縮約されてから「る」と結合していることが認められること、その縮約の際には、様々な縮約の仕方があることを確認できた[14]。もう一つ、特徴的なものとして、外来語語形の語末や語中のラ行音を、動詞語尾「る」の活用形との音連想を利用して「る動詞」化していることが指摘できたことも成果の一つと言えよう。

(三) 外来語の「る動詞」化について

本節では、外来語が動詞化する際、なぜ他ではない「る動詞」化という手段が選ばれるのかについて考えてみたい。

冒頭で、日本語における外国語出自の語は、まず先に名詞の形で借用されるが、その後動詞化の必要がある場合には、サ変動詞「する」の付加によってなされる、つまりサ変動詞化が最も一般的であると述べた。これは、本稿で取り上げている外来語だけではなく、漢語にも言える現象である。

この点と関連して、今回収集した外来語「る動詞」の語例を対象に、その語幹が外来語サ変動詞形[15]をも有しているかどうかを調べ

---

13 「メタボる」は、「メタボリックシンドローム」(metabolic syndrome)という合成語の後項要素が略され、前項要素の一部だけに縮約され、更に前項要素の語根の末音「リ」が音連想によって「る動詞」化したケースである。本稿のcとeという、二つの造語法によってできた「る動詞」である。

14 「る動詞」語幹に縮約語形がよく用いられることは一つの傾向性として捉えられるが、調査した語例の中に不省略の語幹をもつ5拍以上の「る動詞」も、例えば、「カルバチョる」「チャリンコる」「ツイッターる」「ピクニックる」「フィットホクミングる」「ボランティアる」「ユーチューブる」「ワンダーフォーゲる」など、いくつか見つかったことを記しておく。これらは、なぜ省略されずにそのまま語尾「る」と結合したのかについても考究する必要があるが、殆ど2拍または3拍目に特殊音素をもっている例が目立つことを指摘することにとどめ、別稿を期したい。

15 以下、外来語サ変動詞を「サ変動詞」と、また、外来語と機能動詞との共起例を「機能動詞」と略称する。

臺灣大學學術期刊資料庫

ることにした。ちなみに、上で度々指摘してきたように、「る動詞」の語幹が縮約される傾向も考えあわせ、縮約形語幹の場合には、縮約前の語形がサ変動詞化するかどうかについても調べて判断することにした。その調査結果を示すと、表四のようである[16]。

表四「る動詞」語幹のサ変動詞化の有無

サ変動詞の有無	無	有	機能動詞共起有	合計
辞書他	51(81.0%)	9(14.3%)	3(4.8%)	63
x	194(84.7%)	35(15.3%)	0(0%)	229

表四からは、「辞書他」における機能動詞との共起例を合わせると、「辞書他」と「X」におけるサ変動詞有の比率がいずれも8割強であり、大体として近似していることが見て取れる。

ここで、8割以上の、サ変動詞形をもたない「る動詞」語幹（多くは動作性をもっている語幹、即ち動詞または動名詞）が動詞化する際、なぜ「サ変動詞」ではなく、「る動詞」という形をとるのかはたいへん興味深い問題として浮上する[17]。

なお、約1.5割強の、「サ変動詞」形か「機能動詞」も併せ持つ語幹に関しても、既に他の動詞形をもっているのになぜさらに、「る動詞」という形が求められるかについても究明する必要があるのであろう。

ここでは先に、後者の「サ変動詞」形（または「機能動詞」）と「る動詞」形を併せ持つ外来語について検討する。これらには、例えば、次のような例が挙げられる。

「アピる」－「アピールする」、
「コピる」－「コピーする」、
「ダンスる」－「ダンスする」
「ブロックる」－「ブロックする」、

[16] この際、機能動詞共起の有無も併せて調査した。
[17] その語幹は、さらにその意味に動作性の有るものと無いものの二種類に分けられるが、動作性のない名詞語幹が動詞化するのは、別の意味特徴の理由があるのではないかと思われる。この点については、次節（四）で意味用法の特徴という観点から考察することにする。

臺灣大學圖書館開放資料

「バグる」－「バグが起きる」…

これらの例を一見してわかるように、「サ変動詞」または「機能動詞」と比べ、「る動詞」の語幹には縮約形が多い。ところが、縮約の語形は、元の語形に対しては正式ではなく、俗語的な性質を有すると言われる[18]。この点から考えると、「サ変動詞」のほうが一般的で正式な動詞表現であるのに対し、「る動詞」は非正式で簡易な表現として使用されているのではないかと思われる。上の例からも感じられるように、多くの「る動詞」は俗語的性質を帯びていると思われるが、BCCWJ[19]に出現した「メモる」と「メモする」の次の実例、

ex. 時間に追われてないならオススメは、まず 1 万円くらい空港で両替。その時に両替レートをメモる。あとは町をぶらぶらしながらいろんな両替やさんをテェっク。一番いいところでたくさん両替。

（OC13_02174 Yahoo!知恵袋 2005）

ex. わざわざ非効率的な手段を用いるのだろうと、不思議に思っていた。しかし、自分自身の断片的な考えをメモする道具として使うと、テープ・レコーダーはきわめて強力である。

（OB4X_00101 中央公論 1993）

からも、両者の違いは見て取れると思われる。なお、BCCWJ で「メモる」と「メモする」を検索したところ、「メモる」は、『Yahoo!知恵袋』と『Yahoo!ブログ』の 3 件、及び一般図書の 1 件の 4 件がヒットした。一方、「メモする」の場合は 49 件ヒットしたが、その内訳は、『Yahoo!知恵袋』と『Yahoo!ブログ』の 9 件に対し、一般図書の例は 40 件もあった。この相反する検索結果からも、「る動詞」と「サ変動詞」の違いが理解されよう。ちなみに、縮約形語幹を有する「る動詞」、例えば「ゼロる」「サドる」「ネゴる」「パニクる」「レ

[18] 米川（2017:6）を参照。

[19] 国立国語研究所により公開されている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のことである。

臺灣大學學術期刊資料庫

ズる」「リバる」などは、外来語辞典などの意味解釈に俗語用法の語という説明も記されている。

この、「る動詞」の俗語的性質について更に説明を付け加えよう。例えば、「ポシャる」という「る動詞」の語幹「ポシャ」は、元の外来語「シャッポー」の語順を逆にしてからさらに省略された語である。この語形成は、和語語幹の「る動詞」の「チクる」と同様のパターンであるが、両者はいずれも俗語的性質をもっている。つまり、日本語俗語の造語法の一手段である語順を逆にするという方法[20]が「る動詞」に見られることからも「る動詞」の俗語性が窺える。

こう見てくると、外来語が同時に「る動詞」形と「サ変動詞」形を有する場合、その表現上の差異は、前者が俗語的であるのに対して、後者は一般的で正式な表現であるということが判然としてくる。言わば、両者の間には位相上の違いがあり、そのことが、既に「サ変動詞」形を有する外来語の語幹に、さらなる「る動詞」化が生じる所為と考えられる。

語幹の名詞には、おおむね決まっている動詞と共起する、コロケーションとして用いられているタイプの例があるが、それらの語幹が「る動詞」化するものが見られることも確認された。例えば、下記のような例である。

「ウバる」－「ウーバーイーツを頼む」、
「サウナる」－「サウナに入る」、
「ディズる」－「ディズニーランドに行く」、
「フェスる」－「フェスティバルに参加する」…

これらのコロケーション表現とその「る動詞」とを比べると、「サ変動詞」との比較に見られるように、「る動詞」で表現されるほうが俗語的であることを見ることができる。一般的で正式なコロケーション表現より、俗語的な表現効果を出すために「る動詞」の造語が必要になったと思われる。こう見てくると、「サ変動詞」形（または「機

[20] 米川（2017:36）を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

能動詞」や他の動詞とのコロケーション表現）と「る動詞」形を併せ持つ外来語における「る動詞」形の語彙特性に俗語性が明確になる。

この「る動詞」の俗語としての性格は、「サ変動詞」をもたぬ語幹が動詞化する際に、「サ変動詞」ではなく「る動詞」を取ることにもつながると考えられる。要するに、動作性をもつ外来語語幹が、縮約された形で俗語的性質を帯びるようになり、語尾「る」を伴うことによってその俗語性を増すことになると考えられる。これは「る動詞」のみの比率が「辞書他」より「X」のほうで多少高いことにもつながるものとも思われる。

他に、「る動詞」の語幹がマイナス評価的な意味を有することも「る動詞」化と関わると考えられる。例えば、

「アジる」「エバる」「ゲシュる」「ジャムる」「ダフる」
「タミる」「デグレる」「デスる」「デリバる」「ドッペる」
「ディグる」「ディレる」「ネグる」「パクる」…

などの「る動詞」の語幹は、おおむねマイナス評価の意味を有しているが、これらの意味は「サ変動詞」形より「る動詞」形が表現効果的にも適していると思われ、動詞化の際に「る動詞」が選択された結果と考えられる。実は、このマイナス評価語も俗語的な表現効果が求められたものと見ることもできる。

以上、本節では、なぜ「る動詞」化なのかという問題について、「サ変動詞」（「機能動詞」との共起表現などとも）との比較を通して、「る動詞」の俗語性を究明した。この俗語性こそが「る動詞」を派生した理由でもあるし、語幹の縮約と相乗して「X」などに若者ことばとして多用されることにもつながっていることが立証できたと思われる。

（四） 外来語「る動詞」の形成に関わる意味用法の特徴

本節では意味の観点から、どのようなことばが「る動詞」化しやすいのかを考察する。調査方法として、「る動詞」の語幹と「る動詞」

臺灣大學學術期刊資料庫

化後の「る動詞」自身の意味分野を、『分類語彙表—増補改訂版』(改訂版)を基準にして調べる。

1. 「る動詞」の語幹の意味分野について

まず、「る動詞」語幹の意味分野についての調査結果を、表五に示す。

表五　「る動詞」語幹の意味分野

意味分類	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	2.1	2.3	2.5	3.1	3.3	3.5
辞書他	4(6.3%)	14(22.2%)	20(31.7%)	12(19.0%)	3(4.8%)	4(6.3%)	5(7.9%)	1(1.6%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
X	17(7.4%)	25(10.9%)	65(28.4%)	58(25.3%)	25(10.9%)	11(4.8%)	16(7.0%)	5(2.2%)	2(0.9%)	3(1.3%)	1(0.4%)

表五から、「る動詞」語幹の意味分野に見られる、「辞書他」と「X」における類似点と相違点を見ることから始めよう。

まず、類似点は、両者ともに 1.3「人間活動—精神および行為」関係の意味を表す語幹が最も多いことである。「辞書他」では 1.30「心」(「ヒスる」など)、1.31「言語」(「メモる」など)、1.33「行為」(「サボる」など)、1.35「交わり」(「テロる」など)、1.38「事業」(「オペる」など)など、人間活動に関する語幹が幅広く見られる。「X」では、些細な違いも見られ、特に 1.30「心」(「エコる」「ジェラる」など)、1.31「言語」(「パロる」「ポエる」など)、1.33「行為」(「フェスる」「リンスる」など)の三項目に集中している。

次に、相違点として、1.2 と 1.4 と 1.5 において、「辞書他」と「X」に見られる違いを挙げることができる。傾向として、「X」では、1.2 が少ない代わりに、1.4 と 1.5 の意味分野を表す語幹の比率が比較的高いことが見て取れる。以下に、詳しく見てみよう。

a. 1.2「人間活動の主体」の意味分野の語であるが、中でも店(店名も含む)を表す 1.2650 分野のものが多く、特に飲食店が多数見られることが目立つ。このような語幹による「る動詞」は、「その店へ食事などに行く」ことを表す場合がほとんどである。ところが、これらの語幹の比率は、「辞書他」では 2 割強であるが、「X」では 1 割ほどで少ないのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

1.2 分野の語幹に見られるもう一つの違いは、例えば「ガストる」「カフェる」「スタバる」「デニる」「モスる」などの「辞書他」と「X」両方に見られる語は主に飲食店関連で定着度の高い語であるのに対して、「X」だけに見られる「コメダる」「キャンプる」「ジムる」「ジョナる」「セコムる」などには会社や人間の社会活動関連の語の方が多いことである。この点から考えるに、飲食店を表す語幹による「る動詞」は定着度が高く生産性もあるが、新しい傾向としては飲食店以外の会社や店名による「る動詞」の造語が増えていることが指摘できるかと思われる。

b.「X」では 1.4「生産物および用具」項目の語幹もかなり多く、1.3 分野の比率に近接していることも特徴的である。1.43 の「食料」分野の語、1.45 の道具やゲームなどを表す語が挙げられる。前者は、「オムる」「ガムる」「ゴディる」「パナる」「モナる」などであるが、これらの「その食べ物を食べる」という意味の「る動詞」造語はかなり生産性が高いことが認められる。後者としては、「ググる」「ジピる」「タブる」「ツイッターる」「ソリティる」「ダーツる」「マリオる」などを挙げられ、これら「道具を使う」「ゲームで遊ぶ」などといった意味の「る動詞」化も盛んで見て取れる。この手の「る動詞」が増えたのは現代デジタル社会の反映と言えよう。

c. 1.5 の場合も「X」の中では比率が高い。特に 1.57「生命」分野の語が多く、病気（1.5721）や生理（1.571）関連の語に集中している[21]。例えば、「アボる」(流産する)、「コアグる」(血液が凝固する)、「シュワンゲる」(妊娠する)、「ノイる」(ノイローゼになる) などは「その病気にかかる」「その生理現象が起こる」という意味を表すのだが、これらは、縮約された医療専門用語の語幹による造語で、医療業界の隠語として用いられており、位相語的な性格を帯びていると言える。

[21] 語例取集のための資料である、米川（2017）の中に俗語としての医療業界の用語が多数収録されていることにもよる。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

2. 「る動詞」の意味分野について

次に、「る動詞」化後の「る動詞」自身の意味分野についても調べてみよう。その結果を、次の表に示す。

表六「る動詞」自身の意味分野

意味分類	1.3	2.1	2.3	2.5	3.1	3.3
辞書他	1(1.6%)	11(17.5%)	50(79.4%)	1(1.6%)	0(0%)	0(0%)
X	6(2.6%)	45(19.7%)	150(65.5%)	24(10.5%)	3(1.3%)	1(0.4%)

意味分野における「る動詞」自身の特徴として注目されるのは、次の三点である。

a.「辞書他」と「X」両方ともに、2.3「精神および行為」の意味を表す「る動詞」が一番多いことである。これは、前節で見た、1.3「人間活動—精神および行為」の意味分野を表す語幹が多いことの反映である。特に「辞書他」では 8 割近くがこの 2.3 に集中しているが、2.3331「食生活」を表す「る動詞」(「スタバる」「デニる」など）を特徴的なものとして挙げられよう。一方、「X」では、2.33「生活」関係（「キャンプる」「シャワる」など）や 、「興奮」(2.3002)（「ファナる」「イデる」など)、「好悪」(2.3020)（「ジェラる」「ファボる」など)、「禍福」(2.3310)（「エバる」)、「ゲーム」(2.3320)（「アモる」「グラブる」）などのように、2.30「心」の分野と関連する精神活動を表す「る動詞」が多い。また、語幹に 1.43 の食料を表す語が多いことによる、2.3331「食生活」を表す「る動詞」(「オムる」「キムる」「ボバる」など）も少なくない。

ちなみに、飲食関係の「る動詞」の造語法には、上述したように、[店（店名も含む）＋る]と[食料品＋る]の二種類のパターンがあるが、「辞書他」では前者が多いのに対し、「X」では後者が多いことも特徴的である。

b.2.1 では、両者が近い比率を占めているが、「X」では様々な作用または変化といった 2.15「作用」を表す「る動詞」が多く見られる。例えば、「ゴルフる」「サイクる」「チャリンコる」「トレミる」など、語幹が 1.4「生産物および用具」を表す語からの「る動詞」であるが、

臺灣大學學術期刊資料庫

「人がそういった用具を使って動作を行う」といった動詞本来の典型的な意味のものと言えよう。[22]

c.「辞書他」と「X」の違いとしてもっとも目立つのは 2.5 の分野である。「辞書他」では 1 例しか見当たらなかったのに対し、「X」では 1 割ぐらいの例を見ることができるのである。そのうち、2.5721「病気」にかかることや.2570「生理」現象が起きることを表す「る動詞」が目立っているが、これは、その語幹に 1.57「生命」の意味分野の語が多いことからくる傾向であり、医療業界用語としての「る動詞」の増加とも関わっていると言える。

本節（四）の考察を通して、外来語「る動詞」の意味用法の特徴を、次の三点にまとめなおすことができよう。

イ)「る動詞」の語幹には 1.3「人間活動―精神および行為」の意味分野の語が最も多く、派生の結果としての「る動詞」も 2.3「精神および行為」の意味分野の語が多数を占めていることが明らかになった。

ロ)「る動詞」派生の造語的特徴の一つとして、動作性のない名詞を語幹とする「る動詞」が造られることが挙げられる。これらの名詞には、店名や固有名詞に加え、食料品、道具やゲームなどの生産物名詞も含まれているが、動作性をもたない名詞が活用語尾「る」と結合するだけで動詞化され、「その名詞に関わる動作・行為をする」という意味を表す。かなり便宜的な造語手段であるため、特に若者たちによって安易に新しく造語されたり使用されたりすると考えられる。なお、この「る動詞」の造語的特徴は、動名詞または動作性名詞とのみ結合する「サ変動詞」と異なる特徴として、特筆に値する。

ハ)「る動詞」は、病院などの医療業界の隠語として使用されることで、位相語としての性格をも持つようになったことも「る動詞」の特徴の一つとして挙げられよう。

---

[22] その点、「イマシブる」「コンタミる」「サグる」「デグレる」などのような、動作性を有する語幹からの例があるのは自然であろう。

臺灣大學學術期刊資料庫

五、おわりに

本稿では、外来語語幹に活用語尾「る」が結合した、いわゆる外来語「る動詞」の造語特徴などを、既往の外来語辞書や先行文献のみならず、若者ことばの多いとされる SNS の一つである X（旧 Twitter）などのオンライン上の用例までを調査対象に加え、網羅的かつ実証的に考察・分析してきた。その結果の中から新しく確認・主張したものだけをまとめると、以下のようになる。

1)「る動詞」の語幹は 2 拍か 3 拍語が典型的であるが、オンライン資料の「X」では 4 拍語幹もかなり多く、若者ことばでは多拍の「る動詞」も多用されている。

2) 語幹の品詞は名詞類がもっとも多いが、実態としては動詞語幹も少なくないこと、また「X」では動名詞や固有名詞ではない一般名詞語幹の比率が高い。

3) 音韻上で、「る動詞」が撥音と促音に加え、長音にも付きにくいことを実態調査によって実証し、その傾向を特殊拍全般にと広げられた。

4) 語形上からは、「る動詞」の前接語幹には短い語形が求められるため、中に省略や縮約語の語幹に付く様々な造語パターンが見られるが、その際、外来語の語末もしくは語中にラ行音がある場合には、語尾「る」の活用形との音連想を利用し「る動詞」化している。

5)「る動詞」派生の理由を、「サ変動詞」との比較を通して考察し、「る動詞」の俗語性に求めた。既に「サ変動詞」、機能動詞、もしくは他の動詞との決まっているコロケーションがあっても、俗語性効果のために新しく「る動詞」が用いられ、その「る動詞」一般の俗語性はマイナス評価の語幹との結合の際さらに強化されるようになったと主張した。

6) 意味分野の観点から、『分類語彙表』を基準にして「る動詞」の語幹を分析し、紙資料とオンライン資料の類似と相違を論じたが、「X」においては、1.2 の会社や社会活動関連分野と、1.4 のうちの

臺灣大學學術期刊資料庫

「食料」「道具やゲーム」関連分野、そして 1.5 の医療関連用語での造語が活発であることを見た。これらには現代デジタル社会と「る動詞」の位相語的性格が反映されているという私見を論じた。

7）上記した語幹は動作性を持たないという特徴があるが、動名詞もしくは動作性を有する名詞としか結合しない「サ変動詞」とは異なり、これらに付く「る動詞」の例を多く見ることができた。「る動詞」化によって「その名詞に関わる動作・行為をする」といった意味を表すようになるわけだが、かなり便宜的な造語手段であるため、特に若者たちによって安易に新しく造語されたり使用されたりすると考えた。[23]

以上、外来語「る動詞」を対象に造語特徴を見てきたが、これらに加え、和語や漢語を語幹とする「る動詞」も併せて検討する必要もあろう。それによって、現代日本語における「る動詞」の全容をつかむことができると思われるが、今後の課題としたい。

【付記】本稿は、國科會專題研究計畫「日語外來語動詞化之研究」（MOST 111-2410-H-002 -095 -MY2）による研究成果の一部である。

[23] 杉岡（2019:55）では、「インスタ映え」に由来する「映（ば）える」は「る動詞」には該当しないと指摘されている。その根拠として、「映（ば）える」は五段活用動詞ではなく、また濁音化現象を保持している点が挙げられる。しかし、筆者は、「映（ば）える」を「インスタ映え」という複合語に由来する語と捉えられるが、つまり、まず複合語の前項要素「インスタ」が省略され、後項要素「映（ば）え」のみ残り、そして活用語尾「る」が付加されることにより「映（ば）える」というる動詞が形成されたと考えられる。この語形成過程は、本稿で論じた「サボる」などの「る動詞」と同様であり、派生動詞として位置づけることが可能だと考えられる。では、なぜ一般の「る動詞」のような五段活用ではなく、一段活用なのか。その理由は、「インスタ映え」の後項要素「映（ば）え」がそもそも一段動詞「映（は）える」に由来するためであり、即ち、派生された「映（ば）える」も元の動詞活用の形態に影響を受け、一段動詞として定着したわけだと考えられよう。特殊的な「る動詞」なのであろう。

臺灣大學學術期刊資料庫

【参考文献】

野村雅昭（1982）「新語辞典の外来語」『言語生活』366号、東京：筑摩書房、pp.42-54

松井利彦（1982）「漢語・外来語の性格と特色」『講座日本語の語彙 第2巻 日本語の語彙の特色』、東京：明治書院、pp.149-177

村木新次郎（1982）「外来語と機能動詞―『クレームをつける』『プレッシャーをかける』などの表現をめぐって―」『武蔵大学　人文学会雑誌』13－4、(『語彙論と文法論と』（2019）所収）pp.495-510

井上博文（2020）「若者ことばの「体言＋る」動詞」『大阪教育大学キャンパスことば（27)』（大阪教育大学学園だより）pp.12-13

上野義雄（2016）「第3章 動詞 第11節 ル動詞」『現代日本語の文法 構造 形態論編』（早稲田大学出版部）pp.122-128

大石　強（1988）「第1章　序論」『現代の英語学シリーズ〈第4巻〉形態論』（開拓社）pp.1-21

窪園晴夫（2002）『新語はこうして作られる』（岩波書店）

杉岡洋子（2019）「第Ⅰ部 音声と形態 2 形態論・語形成 5新しい動詞の作られ方」『よくわかる　言語学』（窪園晴夫編著）（ミネルヴァ書房）pp.54-55

田川拓海（2020）「外来語の形態論研究：外来語系接辞と新語形成」『日本語と日本文学』66（筑波大学日本語日本文学会）pp.25-38

堀尾佳以（2008）「動詞化接尾辞『－る』について」『比較社会文化研究』23（九州大学大学院比較社会文化研究科）pp.83-91

米川明彦（2017）『俗語入門―俗語はおもしろい!―』（朝倉書店）

辞典

『LOGOBISTA 電子辞典シリーズ 現代用語の基礎知識カタカナ外来語略語辞典 第5版』（2013）（ロゴヴィスタ株式会社）

『コンサイスカタカナ語辞典 第5版』（2020）（三省堂）

『分類語彙表―増補改訂版』（2004）（大日本図書株式会社）

臺灣大學學術期刊資料庫